

ギフトエコロジーの実践現場における創造的活動 —— カリフォルニア州ベイエリアを事例として ——

今堀 洋子

Creative Activities at Gift Ecology Practice Fields —— In Case of The Bay Area in California ——

Yoko Imahori

要 約

人々のつながりの強い地域では今でも残っているおすそ分け、豊かな自然の恵み、余剰のものを周りの人達に贈与する、そのような意味も含まれるギフトエコロジーとは、古くて新しく概念であり、米国カリフォルニア州のベイエリアでは、ギフトエコロジーを実践している人達が多数存在する。本論文では、まず、ギフトエコロジーとは何かを提唱している人、あるいは、同義のことを指摘している人達の言葉から、ギフトエコロジーの意味することを紡ぎだしてみる。続いて、ギフトエコロジーの実践現場であるカリフォルニア州のベイエリアの特徴をあげ、今回筆者が参加したギフトエコロジーツアーの概要についても紹介する。その上で、ベイエリアにおける創造的活動のいくつかを事例としてあげ、実際に現場に行って筆者自身あるいは一緒にツアーに参加した人達が経験し体感したことを通して、その活動がどのようなものであり、そのエッセンスは何であったのかの分析してみる。

キーワード: ギフトエコロジー、恩送り、与え合い、信頼、コミュニティ、自然の恵み、
農的な暮らし、創造的活動、つながり、カリフォルニアベイエリア、贈与経済

1. はじめに

3.11の震災以降、つながりを取り戻すといったことが、取り上げられるようになった。また、目に見えるものだけでなく、目に見えないものにも目を向けるような動きも起きている。一方、未だ地球上の問題をあげればきりがなく、このままでは人類が地球から追い出されてしまうのではないかという危惧もある。その原因の一つとして資本主義、排金主義などがあげられる場合も多い。それが限界にまでできてしまっている今は時代の転換点であり、古いものが壊れ、新しいものが顔を出し始めている時期でもある。新しく生まれるものは、小さく、脆弱である。けれども、地球上のあちらこちらで萌芽していれば、それはいつか花開き、時に大きな木となって実を結ぶ。ギフトエコロジーも、今は、そういった新しく生まれてきた小さな芽の一つである。言葉は違うが、かつて先住民が共通にもっていた贈与の概念とも結びつき、それは我々日本人の中にも確実にある。本論文では、そんなギフトエコロジーの定義から始める。次に、ギフトエコロジーの実践現場であるカリフォルニア州のベイエリアの歴史的、地理的特徴をあげ、今回筆者が参加したギフトエコロジーツアーの概要についても紹介する。その上で、ベイエリアにおける創造的活動のいくつかを事例としてあげ、実際に現場に行って、筆者自身あるいは一緒にツアーに参加した人達が経験し体感したことを通して、その活動がどのようなものであり、そのエッセンスは何であったのかを概観し、創造的活動の創造的所以とは何かを洗い出してみる。

2. ギフトエコロジーとは

2-1 シェアリングエコノミーからギフトエコロジーへの転換

非営利オンライン・マガジン「Sharable」では、世界各国のシェアリングエコノミーの事例が紹介されている(Sharable)。かつて筆者も、モノではなくサービスを売るビジネス形態のうち、(モノを売るのに比べてサービスを売る方が)環境への負荷が低いものを「グリーン・サービサイジング」と名付けた⁽¹⁾。その際、今後は、所有から共有していくビジネス(もしくは経済)の方向にシフトしていくことを予想した。それから、10年もたたないうちに、日本においても、インターネットの普及に伴い、個人や企業がモノや知識などを共有することが容易になり、カーシェアなどのモノのシェア、シェアハウスやAirbnbなどの施設や空スペースのシェア、更には、プロボノなどの知識や知恵のシェアや、時間のシェアなども、シェアリングエコノミーが広がりを見せている⁽²⁾。

米国カリフォルニア州のバークレー周辺で、Service Spaceという団体の創始者で主催をしているNipun Mehtaは、15年以上にわたって、ギフトエコノミーを提唱し、実際にスマイルカードや、カルマキッチンなどの実践を続けている。スマイルカードは、KindSpringが進めている運動で、①だれかに何か親切なことをする、②スマイルカードを渡すことでその人が恩送りできるよう背中を押す、③KindSpringのサイトにスマイルカードにまつわるエピソードを紹介してインスピレーションを広める、④コツコツと小さな親切な行動を積み重ねていくことで世界を変える、というものである。KindSpringのスローガンは、“Small acts that change the world”であり、スマイルカードは、具体的な小さい活動を行うための手段の一つとして提唱され、ツール（カード）が用意されている（KindSpring）。スマイルカー



図1：スマイルカード

ドの使い方として、例えば、高速道路の料金所で後ろの車の分の料金も支払い、スマイルカードを渡すことでそのことを知らせるといったものなどがあり、スマイルカードの様々な使い方は、ServiceSpaceのサイトなどでも紹介されている⁽³⁾。一方、カルマキッチンは、「今、目の前にある食事は、既にだれかによって支払いがされている」ので、自分（達）は、「これから食事をする人（達）のために支払いをする」という料金の設定がないレストランである。Mehtaが、カリフォルニア州バークレーのダウンタウンにあるインド料理店で、月に一回の実験として始めた活動である。料理は、レストランのシェフが担当するが、それ以外は全てボランティアで運営されている⁽⁴⁾。

Mehtaは、シェアリングエコノミーは、今や、シェアリングということではなく、エコノミー（あるいはビジネス）に重きが置かれていると指摘している。本来、シェアリングというのは、人々を寛容さに導くためのものであり、具体的には、子供が自分の好きなおもちゃを他と分かち合う、あるいは混んだバスの座席で席を譲るといったものもそれに含まれると述べている。その意味からして、シェアリングエコノミーのシェアリングは、ビジネスの一形態にすぎず、本来の意味から離れているということになる。

そして、Mehtaらは、スマイルカードや、カルマキッチンなどのギフトエコノミーの実践を続けているうちに、起きていること、あるいは、実践していることは、ギフトエコノミー

より、ギフトエコロジーと名付ける方がふさわしいという結論に達した。というのも、エコノミーは、価値を特定の分野のみに規定するのに対して、エコロジーは多様性を生む関係性の複雑さの相互作用を含んでおり、時には測ることのできない価値も含まれている。我々が何かを贈ると、受け取った人との間で密接な関係が自然に築き上げられる。我々が土を耕し、種をうえ、水をあげた後は、生態系のつながりに任せておけば、時がくれば木々が育ち果実が実するというのが、ギフトエコロジーの典型的な例である（Service Space 2014）。

ギフトの捉え方として、いわゆる個人所有を主とする経済（通常の経済）においては、ギフトは、料金がかからずタダであるものとして受け取られるが、ギフト経済においては、ギフトはタダではなく、ギフトの重要な要素は、ギフトを贈る側、受け取る側の関係性が創られることにあり、Robin Wall Kimmererは、Braiding Sweetgrassで述べている。その上で、ギフト経済における「通貨」には、その根本に与え合いの関係性が存在すると指摘している（Robin Kimmerer, 2013）⁽⁵⁾。このことは、Mehtaが、ギフトエコノミーでなく、ギフトエコロジーと名付けるのが相応しいと気づいた点と合致している。つまり、エコロジーという言葉自体が、与え合いの関係性の上で成り立っているものであるからである。また、経済学者にとっても、「ギフト」と「経済」が並ぶことに、違和感がある矛盾すると意見が多数あったことから、ギフトエコノミーでなく、ギフトエコロジーとした方が言葉として広がっていくであろうと考える。

Mehtaは、今後の社会を展望した時に、エコノミーに先導されたシェアリング革命ではなく、寛容さに先導された寛容さの共有の動きが、時が熟した時に、ギフトエコロジーとして自然と花開くとだろうとも述べている（Service Space 2014）。

2-2 贈与経済、態度経済

MehtaやKimmererが述べていることは、贈与経済、態度経済といった言葉でも語られている。

内田樹と岡田斗司夫との対談本である「評価と贈与の経済学」の中で、内田は、取引の後にすぐ見返り（報酬）を期待する人は、「交換という行為の人類学的な合理性やフェアネスを信じていない人間である」として指摘している。裏を返せば、贈与経済とは、「交換という行為の人類学的な合理性やフェアネスを信じて、すぐに報酬（お金）を期待せずに待てる行為」と定義することもできるだろう。また岡田は、FREEexというシステムを導入し、贈与経済を実践している。「FREEex」という組織では、社員がお金を払って社員の地位（仕事をする権利）を獲得し、社長である岡田は、金銭的な報酬なし（ノーギャラ）で働いている。社員が岡田に給料を払ってくれるので、成立しているシステムで、岡田のファンが社員になって、共同作業をしているのである。これは中世のヨーロッパにおいて、貴族やお金持

ちがお金を出して作家の生活を保障し、好きなものを書かせるパトロン制度に通じるものがあると、岡田は述べている。そして、内田は、少子・高齢化が進む日本社会において、手持ちの「ありもの」の資源を使い回して、それをどうやってフェアにかつ効果的に配分するかが重要で、その際の分配方法は、「贈与」しかありえないのではないかと述べている。つまり、相対的に資源に余裕のある人が若くて貧しい人たちに「チャンス」を贈る。贈るものとしては、授産機会でも、ネットワークや情報でも、技能でもなんでも良く、年配者からのエールを込めたギフトを贈ることが、社会的なフェアネスを基礎づけるだろうと指摘している。それは、手元の資源を、身近にいる人達に贈与して、ローカルなフェアネスを実現し、それを少しずつ広げていくという空想的社会主義者（ロバート・オーウェンやサン・シモン）の考えに近く、その方がいまの世界より住みやすい世界を実現するだろうとも述べている（内田樹、岡田斗司夫、2013）。

次に、中沢新一は、「純粋な自然の贈与」の中で、ギフトエコロジーの概念を、文化人類学、民族学の視点から言葉にしている。まず冒頭で、インディアンの思考法を紹介し、インディアンにとって、贈り物には、「贈与の霊」がセットになっており、「贈与の霊」が動き、流れていくとき、世界は物質的にも豊かで、人々の心は生き生きとしている。だから、贈り物は自分のものにせずに、ため込まず、たえず動いていくものでなければならないのである。なぜなら、人間の魂の幸福は、つねに大地を循環する「贈与の霊」とともにあるものだからと述べている。その理由として、贈与がものを結びつけるエロスの力をもっているからであり、エロスは動きながら、みずからの力を更新していくものだとして述べている。よって、人が人に、贈り物を贈るとき、贈り物となった「もの」と、それを贈ったり、もらったりする「ひと」との間には、深い実存的なきずなが発生する。贈られたものは、ただの「もの」ではなく、贈った人の人格の一部となり、贈り物といっしょに、人は他者の人格ないし魂の一部を受け取ると、指摘している。このことは、MehtaやKimmererのエコロジーの思想、あるいは、ギフトエコロジーにおける「通貨」のとらえ方と同義であると言えるだろう。人類がまだ狩猟をおこなっていた時代には、人間が手にすることができる富や財産の中に、およそ堅固なものは、ひとつも存在しなかった。人間は、森の神から獲物を、「贈与」として受け取った。生命の源泉である、目に見えない、霊的なエネルギーの源泉から、「有」の世界への境界面をこえて、動物の豊かな肉体が、獲物として人間にもたらされる。そして、人間はそのような贈り物をしてくれる、森の神の好意に答えて、さまざまな返礼をした。人間が自然にたいしていつも礼儀深く、感謝の気持ちをおこたらない限り、森の神は人間への贈与を続けてくれた。また中沢は、「新贈与論序説」の中でレヴィ・ストロースの言葉を紹介している。それは、「贈与という現象にあつては、贈ったり贈られたりしたものの価値には、値段がつけられない。つまり、贈与ではものの価値は計量化されないのだ。また贈与がおこなわれる

場所では、ものや言葉の意味も、ひとつには決定されない。価値は意味をひとつに決定するよりも、贈与がおこなわれる場所では、価値や言葉の対話やキャッチボールがくりかえされ、そのくりかえしのなかから、おたがいの間の理解や信頼が生まれてくる、そのプロセスのほうずっと大切にされているのである」というものである。エコノミーでは、値段をつけることが前提であるのに対し、エコロジーは、値段をつけることができない。そして、結果ではなく、やりとりのプロセスが大事にされ、その過程で信頼関係も醸成されるというのが、ギフトエコロジーの神髄ともいえるだろう。中沢は、「新贈与論序説」の最後に、霊と貨幣の共通と対立について述べている。まず、霊も貨幣も、ともにある種の「器の破壊」を通して、出現してくる点が共通であるとしている。貨幣は、「もの」の具体的な使用価値の中から、具体性を消し去った抽象的な交換価値があらわれてくるときに、貨幣出現の準備が整えられ、その結果、抽象的な無形の流動性として、商品社会の中では、どんなものにでも姿を変えることができるのである。霊と貨幣の本質的なちがいは、貨幣という無形の流動体は、「無」への通路を閉ざして、人間を有限な「有」の世界の中に閉じ込めてしまう。ところが、インディアンが言うところの贈与の霊がセットになっている贈与は、人の心に霊の動きを発動させ、「有」に閉ざされた世界に、愛の現実性を開こうとする。現在の市場経済社会で、この霊の動きは押さえつけられて、貨幣の数字で覆い尽くされているように見えるが、社会の見えない奥底には、霊が突き動かす贈与の精神が、いまだに静かに呼吸を続けており、愛の可能性が死に絶えたわけではない。中沢は新しい贈与論が可能だと述べている、その新しい贈与論とギフトエコロジーは同じベクトルであると考える（中沢新一、2009）。

資本主義にとらわれ過ぎた価値観をいったん「ゼロ」に戻せば、今まで行ってきたものとは違う形の経済の流れがあらわれてくる。坂口恭平は、その新しい経済の考え方を「態度経済」と名付けている。坂口は、建築家を目指している時に、建築という人間に一番大事なものが、完全に貨幣経済と繋がってしまっていることこそが、全ての元凶であるという考えに至った。そして、動物界では自らの住处（巣）をゼロ円で手に入れているのに、なぜ人間はできないのかという疑問を持ち、結論として、地球の土地を全て人間たちが私的所有しているからという結論に達した。この疑問にきちんと答える専門家はいなかった。そして、日本で唯一、それを実践し、鳥の巣のように家を建てている人達が路上生活者であるということを見つけた。そして、自分が疑問に思っていることを、社会に表明していく方法論を身につけて行動していくうちに、自分の「仕事」が社会に役立つ時がきて、その時、あらわれてきた新しい経済を坂口は「態度経済」と名付けたのである。態度経済は、今までの商品を貨幣を使って交換していくギブ&テイクの経済でなく、常に、「ギブ&ギブ&ギブ」と、徹底的に贈与をし続ける経済だと述べている。坂口自身も「0円ハウス」という最初の著作も印税0円であり、自身で海外にも営業にまわった結果、世界中で本が売れ、展覧会も開催され、つ

ながりも生まれた。徹底的に贈与をし、全く変化しない「貨幣」を求めるのではなく、常に変化し成長する自らの「創造性」をさらに贈与する、そのような態度を表明することが、これから独立して生きる人間には重要な経済流通になると述べている。最後に、坂口は、土地や家だけでなく、人間の創造性さえも私的所有してはいけないと考えており、その理由は、その方が、もっと自分の環境や、社会が良くなっていくと体感しているからと語っている（坂口恭平、2011）。

2-3 改めてギフトエコロジーとは

結論として、ギフトエコロジーとは、新しい概念ではなく、市場経済、資本主義一辺倒になる前までは、当たり前に行われてきたことでもある。おすそ分けという言葉があるが、自分の家で食べきれなかった余剰物を、ご近所におすそ分けするといった行為は、今日でも、人々のつながりが残っている地域では、日常的に行われてきている。また、かつて村落共同体で所有していた入会地も、そこから採れる自然の恵みは、だれかのものでなく、皆のものであるという点で、ギフトエコロジー的であるだろう。また、ギフトエコロジーの根本には、与え合いの関係性があり、贈与をし続けることで、人とのつながり、自然とのつながりが広がり、深まっていく。それは、結果として、共同体を再び創り上げていくことになる。坂口が指摘しているように、だれもが、創造性さえも自分のものとして独占するのではなく、皆のものとして惜しみなく贈与することができれば、世の中の仕組みは、もっとシンプルになり、もっとオープンになり、全てを貨幣に頼らなくても生きていけるようになるだろう。

ここで、頭で理解することと、腑に落ちること（体感すること）には、大きな開きがある。次の章では、実際に筆者が参加したギフトエコロジーツアーに関して、まずは、実践現場の地理的特徴、歴史的背景、文化的背景、経済的状況、環境的な状況などについて紹介していく。

3. ギフトエコロジーの実践現場

3-1 カリフォルニア州バイエリア

今回、ギフトエコロジーツアーで訪れたのは、カリフォルニア州のサンフランシスコ・バイエリアであり、カリフォルニア州北部の大都市サンフランシスコとオークランド、またバークレーなどその近郊の都市を含めたサンフランシスコ湾の湾岸地域と、少し南下したサンタクルーズである（図2の地図参照）。

① 気候

バイエリアは年間を通して季節ごとの気温差は日本に比べ少ない。夏は涼しく平均気温

は15℃前後で、最高でも18℃前後(平均最高気温20℃前後)冬は最低8℃程度と暖かいが、夜はかなり冷え込み平均気温11℃前後である。ほとんど雨は降らないが、11月～3月は比較的雨が多く、朝夕に霧が発生しやすい地域もある (Bay Spo)。ここ数年、雨が極端に少ない大干ばつに見舞われているため、各地で取水制限がされている。

② 経済

サンフランシスコ・ベイエリア南部には、シリコンバレーがあり、Google、Apple、Facebookなど大手IT企業が本社を構えている(けんぽー、2015)。最近、シリコンバレーが北上して、IT企業がサンフランシスコ市を中心とするサンフランシスコ郡にも立地している。その結果、裕福な人々がベイエリアに住居を移し、その影響で、物価が高騰し、今まで住んでいた住民が追い出される、あるいは貧困に陥るという格差問題が起きて問題になってきている。

③ ヒッピー文化

バークレーには、カリフォルニア大学バークレー校がある。60年代に反戦運動はここで生まれた。ヒッピー発祥の地でもありアカデミックな人やアート系の人が多く住んでいる。

湾岸戦争当時も、米国の中で真っ先に反戦運動が起きたのもこの地域である。当時、この地で大学院に通っていた中野民夫は、日本人の仲間達と反戦運動に参加して、この地域が、日本の10年先を行っていると感じたと言っている。また、モンレー湾の北端にあり、サンフランシスコ市からは南約72マイル (115km) にあるサンタクルーズは、のどかな海浜と海岸レッドウッド森林で広く人気を博し、リゾート地として確立された。カリフォルニア州サンタクルーズ校もあり、そのリベラルな社会傾向からヒッピーの人々が愛する町でもある。このように、ヒッピー文化が根強いこともあり、現在でも、オルタナティブな社会という意味で、世界の最先端を行っている地域であるといえる。



図2: カリフォルニア州ベイエリア

出典: google map

3-2 ギフトエコロジーツアー

2015年5月31日から6月10日かけて、TUP2015バイエリアギフトエコロジーツアーが遂行された。呼びかけ人は、共感革命家のソーヤ海と、鈴木栄里である。ソーヤ海は、

Tokyo Urban Permacultureを主宰しており、これまでも、年に数回、ツアーを主催し、西海岸のワシントン州（シアトル）、オレゴン州（ポートランド）、カリフォルニア州（バイエリア）地域の、パーマカルチャー、あるいは、トランジション・タウン、シティリペアなどの創造的活動の地域を案内するということを続けてきている⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾。そんなソーヤ海の活動に共感して、今回、鈴木栄里も、このツアーの企画、呼びかけ人となった⁽¹⁰⁾。

二人からのギフトエコロジーツアーの呼びかけは以下のような文章で始まっていた⁽¹¹⁾。

今回のパーマカルチャーツアーではカリフォルニア州バイエリアのパーマカルチャーやアグロエコロジー実践の場の紹介に加え、ギフトエコロジーの実践を試みようと思う。

事の始まりはソーヤ海がバイエリアでも最も紹介したい！と思っているパンチョとサムとの熱い会話から。パンチョとサムはオークランドで共生革命家として活動しているすごい二人。彼らはギフトエコノミー（ギフト経済）ではなく、お金を介さない、人と人との関係性による支え合いの生態系の中で生きることを実践していて、それをギフトエコロジーと呼んでいる。彼らをギフトエコロジーの実践家として、みんなにぜひ紹介したいと思っていたら、彼らから広めたいと思っている世界は紹介するだけでなく、実践することが大事だとツアー自体をギフトエコロジー実践機会として進めることを後押しされた。

一緒にツアーを計画していたTUP2014参加者でバイエリア在住の鈴木栄里と何度か話した後、ギフトエコロジー実践ツアーにすることを決定！正直言って、二人ともいまだにこの決定にワクワクと一緒に緊張もしている。もともとは渡航費抜きで一人あたりの参加費15万円のツアーを計画していた。そこにはレンタカーや宿泊代、現地で案内してくれる人への謝礼などの実費の他にカイと栄里のそれぞれに渡航費や宿泊費、そしてツアーのコーディネート代を追加して参加費を計算していた。それをギフトでやるってことは、二人にとっても宿泊代とかレンタカーの費用はどうしようとか、渡航費どうしようとか、家賃どうしようとか、現実的な心配事も頭をかすめた。それでもやってみようと思ったのは贈り合いの関係性が持つ力を試してみたいと思ったから。コンセプトとして学ぶだけでなく、みんなでギフトエコロジーを体感したかったから。Be the change you wish to see in the world.

それに、私たちはギフトの精神が生み出す力を信じているし、心ある交換から生まれる関係性の素晴らしさを広めたい。お金を介しての関係はその金額を払えない人とはそもそも関係性が生まれなくなってしまう。それにお金だけの交換では、その交換で終わってしまうのはもったいないような人達とのより深いつながりのチャンスを逃してしまう。参加するみんながツアーを作ることに関わってくれた人に対してお金だけでなく、スキルやリソースで

支えあったり感謝を伝えあったりしながら、ギフトエコロジーを通じて何が生まれてくるのか、このツアーを通じて体感してほしい。

尚、ツアーの参加条件としては、

- ✓ このツアーをただの無料ツアーと思うのではなく、ギフトエコロジーを真剣に実践したい人
- ✓ ツアーの前後を含めチームとしてこれから私たちとギフトエコロジーを実践していきたいと思ってくれる人
- ✓ ギフトエコロジーを始め、パーマカルチャーやアグロエコロジーを学んだり多くの発見をしながらツアーと一緒に楽しめる人
- ✓ 前代未聞の未知の経験を一緒に作っていきたいと思ってくれる人
- ✓ ツアーの前後やツアーの間を通じて、スキルやリソース（記事を書いたり、映像を作ったり、写真撮ったり、料理したり、なんでも）で貢献したい！と思ってくれる人

というものであった。そして、ツアーの応募の際に、①自分のこと（自己紹介、自分のパッション）、②どうしてこの企画に参加したいのか（ギフト経済に対するこれまでの関わりと思いも含め）、③ツアーの前後とツアーを通じて貢献したいギフトを、それぞれ提出した。

応募者が定員を超えたため、呼びかけ人が応募の書類などから、12名を選抜した。結果として、20代から50代の男子4名、女子8名のメンバーのツアーとなった。



図3：ギフトエコロジーツアー参加者と海と栄里@Casa De Paz
鈴木栄里撮影

今堀：ギフトエコロジーの実践現場における創造的活動 ～カリフォルニア州バイエリアを事例として～

尚、ツアーの行程は表 1 の通りであった。ツアーの最中に、当初の予定にはなかったことも組み込まれ、常に予定は変化、進化していった。結果として、多様な創造的活動を体感するツアーとなった。

表 1：TUP2015ベイエリアギフトエコロジーツアーの行程表

日にち	行程
5/31 (日) 1 日目	・ バークレーのカルマキッチン Karma Kitchen in Berkley ・ サンタクルーズのサリーとビームの家へ
6/1 (月) 2 日目	カリフォルニア大学サンタクルーズ校 様々なアグロエコロジーの見学。 ・ Center for Agroecology and Sustainable Food Systems with Tim Galarneau (CASFS) ・ Alan Chadwick garden with former apprentice Ben Kutcher ・ Kresge Garden and Common Ground Center tour with Dave Shaw ・ World Cafe with students on the gift economy ・ Back to Sally and Beems with natural farming giftivists Suhee and Patrik
6/2 (火) 3 日目	・ Alternative Santa Cruz tour (e.g. Bike Santa Cruz County, Bike Church, Santa Cruz Fruit Tree Project) with Tawn Kennedy ・ Cruz Fruit Tree Project with Fairytale Farm ・ Andy のガーデン ・ Program in Community and Agroecology (PICA) tour with Mira Michelle ・ Potluck at PICA with sustainability activists! ・ Back to Sally and Beems
6/3 (水) 4 日目	Food and Meditation ・ Homeless Garden Project with Jes Walton ・ Downtown Farmers Market with foodies of Santa Cruz ・ Talk with Nipun Mehta ・ Awakin Santa Clara community meditation and meal with the Mehtas ・ Casa De Paz / Canticle Farm イーストベイ (オークランド)
6/4 (木) 5 日目	Casa De Paz (Meditation, Farm work, Food prep) ・ Meditation ・ Casa de Paz/Canticle Farm tour and presentation of the project ・ All day do things with Pancho and Sam
6/5 (金) 6 日目	Casa De Paz (Meditation, Farm work, Food prep) ・ Meditation ・ All day preparation for Awakin circle at Casa de Paz

今堀：ギフトエコロジーの実践現場における創造的活動 ～カリフォルニア州ベイエリアを事例として～

6/6 (土) 7 日目	EAST BAY PERMACULTURE • Meditation • A Place for Sustainable Living Tour and garden project • Paul&Carolina at Rock the Bike • Bioasis • Ashby community garden • Sustainability agents, potluck BBQ at Ayakos
6/7 (日) 8 日目	EAST BAY PERMACULTURE 2 • Gill tract farm with Allison Shiozaki 大学が開発を予定していた農場地を地域の活動家がオキュパイ。このグリラガーデニングを経て今では大学とコミュニティがアグロエコロジー実践共同研究をすることになった場所 • Lunch at Bay Edo Wakana Kawamura' s place with revolutionary Japanese women • Edible Schoolyard tour パークレーの食育菜園教育実践モデル中学校 • Auckland Hills Food Forest
6/8 (月) 9 日目	Occidental Arts and Ecology (OAEC & Sebastopol) • OAEC tour By Olivia(Kitchen Manager) • Sebastopol Community Market • Sebastopol Permaculture Skills Center tour
6/9 (火) 10 日目	San Francisco • All In Common Garden and talk to Tree • Dinner
6/10 (水) 11 日目	Each on their own path パークレーで解散

4. 北ベイエリアにおける創造的活動の事例

4-1 創造的活動の事例研究へのアプローチ

今回、ギフトエコロジーの実践現場に出かけ、多様な創造的活動にふれた。その中で、①ギフトエコロジーのベースになっている創造的活動、②ギフトエコロジーの思想で広がった創造的活動、③ギフトエコロジー周辺の創造的活動の3つに分類し、筆者あるいは参加者が、経験、体感したことをベースに、その活動がどのようなものであり、そのエッセンスは何であったのか分析を試みる。

4-2 ギフトエコロジーのベースになっている創造的活動

ここでは、前述のカルマキッチンとその思想的ベースとなっているAwaken Circleを取り上げる。

① カルマキッチン

2章の1節でも紹介したカルマキッチン、ツアー初日、パークレーでの月1回のカルマキッチンの開催日だったので、空港から直行した。普段は、Himarayasというインド・ネパール料理のレストランで、月1回、料理はレストランのシェフが担当し、それ以外はボランティアによって成り立っている。ボランティアスタッフによって手渡されたメニューには、カルマキッチンの文字の下に、“Growing Generosity”つまり「寛大さを育むところみ」と明記されていた。更に、「このベジタリアン料理は、ボランティアスタッフが心をこめて料理し、給仕されたものです。そして、ゲストの皆さんに、純粋なギフトとして提供されたものです。贈与の輪を完全につなぎ、この実験を継続していくためには、あなた方ゲストも、恩送り(“Paying-it-forward”)の精神で、これから訪れるゲストのために貢献してください。」と記されていた。メニューに書かれている三種類のカレー、ライス、ナン、飲み物(リストの中から選んで注文)、デザートは、断らない限り全て提供され、どれもおかわりは自由であった。

食事をしながら、ボランティアのスタッフから説明を受けた。ここ、パークレーで始まったカルマキッチンは、アメリカの6つの都市で開催さ



図4:カルマキッチンでのソーヤ海によるNipunさんへのインタビュー

れている。場所によっては、週1回開催されているところもある。世界でも25の都市で開催されており、大阪でもおん食堂で2015年7月まで開催されていた⁽¹²⁾。ここで月1回開催されているカルマキッチンでは、毎回、100人から150人の人達のランチを提供している。カルマキッチンは、信頼関係で成り立っている。お店には、家賃も含め決まった額の支払いをしており、残りがギフトエコロジーの実践になっている。ここでボランティアをする理由は、より寛容な人になるため、自分の良い部分を育てるためであり、ここで培われた寛容さや、やさしさが日々の暮らしでも役立っているという。以前は、投資関係の仕事をしており、寛容さ、共感に投資をしようと試みたが、お金自体が問題であると感じ、それ以来、与え合いの循環に力を入れるようになった。ここのボランティアをするにはWebSiteでサインアップをすれば良い。ギフトエコロジーの実践は、(経済的に)ギリギリの生活の中でするのは難しいが、十分にあれば(あることがわかれば)問題ない。言い換えると、自分が豊かである(と感じている)時はやさしいが、そうでない場合は難しい。ギフトエコロジーは、お金ではなく、お互いの関係性が大切である。ここでの支払いの際、自分は何をどれくらい恩送りしたいか、それぞれが考えることになる。大事なものは、外の変化ではなく、自分の内側で起きている変化に気づくことである。

食事の後、0円と記載されてる請求書が渡された。そこには、メニュー同様にメッセージが書かれていた。その内容は以下の通りである。このギフトの輪をつなげるために、今度はあなたが恩送りをする番である。実際によく聞かれる質問として、この食事を出すのにどれだけのコストがかかっているかというものがある。のべ100人のボランティアの時間と、食材に650ドルのコストがかかっている。けれどもそれだけではなく、寛容の輪を保つために、信頼とサポートと創造的活動の積み重ねが求められている。それがどれくらいの価値かは計り知れない。ギフトエコノミーの経験がどれくらいの価値として評価されるのだろうか。それはわからないけれど、カルマキッチンは、そういった問いを問い続ける場所であり、内包された恩送りの精神とつながる場所でもある。明らかなことは、今日のあなたがたゲストのお金の支払いによる貢献で次回のゲストの人達をもてなすことになるということである。もし、金銭的に余剰ができれば、他の寛大さをベースにしたプロジェクトに寄付される。コストを全て賄える時もあるし、そうでない時もある。けれども、全体的にみれば、この試みは持続可能で、ゲストの人々をもてなすことができる機会に恵まれている。

ツアーメンバーの土井彩は、ツアー終了後、カルマキッチンの創設者Nipun Mehta氏にインタビューを行い、それを記事として公開している⁽¹³⁾。それによれば、Nipun Mehta氏は、1975年12月31日生まれ。UCバークレーでコンピューターサイエンスと哲学を専攻。大学三年生のときに働いたIT業界で必要以上のお金を得て、全てギフトすることを決断。現在もギフトな生き方を歩み続ける。また、カルマキッチンの実験を始めた理由として、「今私たちが

生きているのは、個人社会ですよ。私はどうするのか”“私はどうやって生活していくのか”“私はどう自分の恐れと向き合っていけばいいのか”。私、私、私…と、いつも自分中心で考えねばなりません。でも母親の胎内にいるときに、“5年プランを私はどうやるか”なんて考えませんでしたよね。私たちが相互に関係しあい、そして協力しあう世界。つまり全体意識のようなものと私たちが切り離されたとき視点が個へと傾き、こういった考えに陥るのです。」と語り、そこでレストランという形態をとり、利用者の意識をつなぐ実験をしているのが『カルマキッチン』だと語っている。また、「店に行ったら何かを買うとき、値段が書いてあります。お金を支払って商品を受け取ると、売買成立です。これが既存の経済システム。いっぽうで、例えば私が友人の肩をマッサージします。その交換に友人から何かを返してもらうのではなく、彼に他の人の肩をマッサージしてもらう。それが一周したらいずれ誰かが私にマッサージをしてくれるというひとつの循環が生まれますよね。『カルマキッチン』ではこの社会でその優しさのサイクルが可能なのかという実験をしているのです。」とも語っている。ちなみに、既存の経済システムは、売り手、買い手のやりとりで、直線的であるのに対し、ギフトエコロジーでは、恩送りが次々と起こることで、輪の形になり、循環し始めるのである。

② Awaken Circle

カルマキッチンの思想的ベースになっているのが18年間毎週水曜日にMehta家で行われているAwaken Circleである。カルマキッチンのボランティアスタッフも多くはこのAwaken Circleに参加している。Awaken Circleは、1時間の瞑想から始まる。その後、問いが出され、その問いに対して、それぞれ自分の人生を振り返り、感じたことを一人ずつ順番に語っていく。それが終わると、用意された食事を、黙って静かにいただく。18年間で4万から5万食を無償で提供してきたそうだ。当日、ここに来た人には、だれでも食事を提供するので、その中には、元殺人犯もいたし、グーグルの幹部もいた。我々が参加した当日も100人近い人達が集まっていた。それだけの人が収容できるほどMehta家は大きく、裕福な家だといえる。

Awaken Circleが始まる前に、Nipun Mehta氏の話聞ける機会に恵まれた。Mehta氏は日々、ギフトエコロジーの実践と体験をしており、ワクワクする感覚を取り戻している。その裏側では、恐怖や恐れとも向き合っている。ギフトエコロジーの実践では、自然体でありのままの自分であること、そしてギフトを与えると同時に受け取ることだと実感している。そのことによって、感謝や幸せを感じ、自分の中のセンサーが高まり、深まっていく。恐れとは、今ココを生きていないということでもあるので、恐れずに向き合うことで、今ココを生きられるようになる。ギフトを与えることと受け取ることというのは、呼吸のようなものと捉える。ハク（与える）、スウ（受け取る）というように。ギフトを受け取るということが、与えてくれた人にとってのギフトになる。そして、その行為は、信頼をベースに行われる。Mehta氏は、経験的にギフトエコロジーは、3つのステップがあると指摘している。

それらは、「まず第一のステージは、寛容さを学び、愛や親切を与える練習をすること。そして、第二のステージとして、与えると同時に受け取る練習をすること。与えることは、必ず何かを受け取ることになっていることに気づくこと。そして第三のステージは、無心に踊ること。何を与えよう、何を受け取ろうという思考を手放し、心に従って生きることを選ぶこと。」である⁽¹⁴⁾。

4-3 ギフトエコロジーの思想で広がっている創造的活動

バイエリアには、ギフトエコロジーの実践家が複数いて、その輪が広がっている。その中には50年間にわたり、無料で食べ物を配り続けているツリー氏もいる。彼は、1967年当時ヒッピームーブメントの発祥の地であるヘイトアッシュベリーで食料を無料で配っていたDiggersと言う人たちの活動に触発され、サンフランシスコに来了。以来、サンフランシスコで、ギフトエコロジーの実践をしている⁽¹⁵⁾。ここでは、そんなツリー氏をヒーローとして、彼の後を追っているパンチョとサムのカサ・デ・パズでの創造的活動と、ギフトエコロジーツアー自体のことを取り上げる。

① Casa de Paz

ツアーの4日目から6日目までの三日間、宿泊を提供してもらったのが、Casa de Paz（カサデパズ、スペイン語で“平和の家”を意味する）である。Casa de Paz は、オークランド東部にあり、6年ほど前、黒人青年が鉄道警官に撃たれて非業の死を迎え場所にも近い。不法滞在をするヒスパニック系の移民やギャングが多く住み、物騒な事件が頻繁に報道されている貧困地域である。周辺はスーパーが撤退し、お酒を販売しているお店しかなく、食料砂漠地帯となっている。ここに、パンチョとサムという二人の男性が、ギフトエコロジーの思想で、新しいコミュニティを創っている。彼らは、常に家をオープンにして、鍵は一切かけない。いつだれが入っても良いような環境を整えている。共有のスペースでは、極力電気を使わず、夜もろうそくの灯りで過ごしている。彼ら（特にパンチョ）は、ガンジーの思想に共感しており、どんな時にも、常に非暴力を意



図5：Casa De Paz の瞑想ルーム

識して行動している。家の二階は、瞑想の部屋になっており、朝夕、毎日、朝1時間ずつ瞑想が行われている（図5は瞑想ルームの写真）。そして、毎週金曜日には、ここでもAwaken Circleが行われている。また、庭は、パーマカルチャー的なガーデンが広がっており、仲間と共に、ガーデンの管理もされている。

彼ら自身が、ギフトエコロジーの思想で、自分の仕事に値段をつけず、お金に依存しない暮らしをしている。それだけでなく、あえて、ギャングの多い地域に場を設けて、この地域の人々のつながりを取り戻す活動をしている社会活動家でもある。ギャングが集まり、貧しい地域でもあるので、子供たちもギャングになるしか道がないという現実がある。その中で、アパートの前のちょっとしたスペースをコミュニティガーデンにしたり、あるいは、公園にも、実のなる木などを“勝手に”植えて、ガーデンにしてしまう（これをゲリラガーデンと呼ぶ）といった活動をしている。コミュニティガーデンができれば、住民の中で、それを世話する人達が出てきて、住民の間での対話も生まれる。ガーデンでできた野菜は、当然、ギフトとして皆に分け与えられる。坂口恭平が路上生活者の実践に気づいたように、ここでも、だれのものでもない土地を、皆のものとして活用をするという発想だ。ただし、公園に、許可なく果樹や野菜を植えることは、時として、一掃されてしまう場合もある。その際にも、ガンジーがそうであったように、非暴力で対抗する。つまり、果樹をつぶそうとするトラクターの前に、身体にチェーンをまいて座り込みをするなどの行動に出るのである。

パンチョとサムは、コミュニティの人気者である。地域ですれ違う人々に声をかけ、人々からも笑顔が返ってくる。ギャングの集団に入りそうになった少年が、パンチョとサムのおかげで、留まることができたということもあったとパンチョが語ってくれた⁽¹⁶⁾。

Casa de Paz に滞在中、パンチョとサムをはじめコミュニティのメンバーを囲んでの対話が行われた。ここは、35年前からテリー夫妻（コミュニティのメンバー）が住んでいる。パンチョは、4年前、NVC（非暴力コミュニケーション）のワークショップを受け、住居を持たない（ホームレスでなく、ハウスレス）になった。統合的に非暴力を生きるためにはコミュニティが必要と感じて、15人でCasa de Paz に暮らし始めた（現在は4名で住んでいる）（マーシャル・B・ローゼンバーグ、2012）。最初にすることが、自分達の心の壁を取り払い、分かち合うといった価値観をお互いの中で醸成すること。ここでは、オルタナティブな文化を創りあげている。Casa de Paz で共有している価値は、①霊性（スピリチャリティ）、②非暴力、③共同体、④足るを知るといったものである。サムは、それまで住んでいた豪邸を手放し、お金に依存しない暮らしの実験を始めた。物事をシンプルにし、モノをなるべく持たない暮らしにした。パンチョは、UCバークレーの元宇宙物理学のPh.D獲得の寸前で、大学が核兵器の開発ラボをもっていることを知り、その機関からPh.Dを得ることに違和感を覚え、UCバークレーを離れた。現在は、VISAなしで米国に不法滞在中である。2011年のOccupy

Oaklandの活動では、広場でひとり瞑想をしながら（非暴力で）座り込みをしていたら逮捕され、そのことが全国ニュースに取り上げられた。ギフトエコロジーを実践して実感することは、「精神状態が満たされているなら与えられる」ということ。お互いが支えあっており、お互いのニーズを感じることができ、生態系の中で生きていると感じる。だから、日々、幸せに生きていける。

また彼らは、ツアー開始前、鈴木栄里との対話の中で、

「ギフトエコロジーは人をつなげる力がある。そして贈り合いの信頼関係の中から、不足・欠乏の意識から豊かさへの意識に変化が起こってくる。人が繋がるということはそこにすでに存在する無数の資源にみんながアクセスできるようになって、力強いコミュニティを生むことになるんだ。」

とも語っている（鈴木栄里、2015）。

② ギフトエコロジーツアー

今回のツアー自体が、ギフトとして、参加者に贈られた。それをどう受け止め、どのように恩送りをするかは、参加者一人一人の課題でもある。このツアーをギフトにするという提案を、ソーヤ海からされた時に、鈴木栄里の驚きや戸惑いが、自身のブログに記載されている。それによれば、Casa de Paz のパンチョとサムにツアーのことを相談に行ったソーヤ海は、そこで、ツアー自体をギフトにして、自分達がギフトイビズムの体現をすることを促されて、それを受け入れた。そのことを聞かされた時のことを、鈴木栄里は次のように語っている（鈴木栄里、2015）。

最初のリアクションは「えっ?!?!ギフトでやるってどういうこと?ドネーションでやるの?経費はどうするの?」とちょっとパニック。でも、その後すぐ、「いや〜。海らしいわあ〜。」と笑えた。PanchoとSamと熱い会話をかわして超インスパイアされて、「すごいよ〜!これ実行できたら画期的!」と、このまだ始まってない新しい試みにワクワクして海が想像できた。だからといってツアーを「海がやりたいんじゃないか」と思ってやりたくはなかったし、これをタダ働きのボランティアとも思いたくなかった。だからギフトでやるとは実際どういうことなのかをちゃんと自分なりに理解したかった。

その後、鈴木栄里は、カルマキッチンに出かけ、ボランティア・スタッフとしてもかかわり、Mehta家やCasa de Paz のAwaken Circleに出かけていき、ギフトエコロジーの冒険の旅に入っていくのである。ギフトエコロジーツアーを準備していく中で、2章で挙げたRobin Wall Kimmererの言葉に出逢い、彼女自身の気づきと変化について次のように述べている（鈴木栄里、2015）。

「このギフトに対する考え方のシフト(ギフトと無料のものとは違う)は、このプロジェクトの私自身の関わり方に対する見方も変化させてくれた。これがこれまでのボランティアの活

動（タダです仕事）ではなくて、自分が意識的に新しい価値やコミュニティ、資本や関係性を自分自身と世界に対して築く活動なんだと思うことができた。更に、ギフトエコロジーにおいても一つ重要な要素は、交換の裏になる意識の変化。ギフトエコロジーを実践するには既存の貨幣経済から自分を隔離する必要はないということ。ただ交換の際、取引の意識から信頼の意識への変化や不足の感覚から豊かさの感覚への変化が重要なんだよね。それがあるだけで、交換という行為が全く違う意味を持つ。」

とも述べている（鈴木栄里、2015）。まさに、彼女の中で、ツアーを企画する段階で、ギフトエコロジーへの冒険の旅が始まっていたということがわかる。

このように、ツアーの呼びかけ人であるソーヤ海と鈴木栄里は、一足先にギフトエコロジーの冒険の旅を始めている中で、その冒険の旅に誘われる形で、我々12名はツアーに参加した。企画段階で、二人が戸惑いながら気づいたことを、我々はツアーの中で追従するような形になった。ツアー自体がギフトであり、ツアー中の3箇所の宿泊先、そして、ツアー中のほとんどの食事が、美味しい手料理としてギフトで与えられた。加えて、訪れた多くの場所でのパーマカルチャーやアグロエコロジー、ギフトエコロジーの実践者やエキスパートの人たちからの時間と情熱もギフトであった。ギフトのシャワーに、我々参加者は、戸惑いを覚えた。けれど、その受け止め方や戸惑いや気づきは、人それぞれであった。筆者は、最初の段階では、このギフトを、どのようにお返しすれば良いのかということが気になった。けれど、ギフトのあまりの多さに、いただいた人にすぐに返していくのは無理だと気づいた。次の段階では、自分が、「このツアーの中で貢献できることは何なのだろうか？」ということに、始終思いを巡らせた。そして、自分で、できる貢献に力を注いだ。それは、料理であったり、ちょっとした通訳だったり、メンバーの話に耳を傾けることだったりという、一つ一つはとても小さなことだった。その中でも、一番気になったことは、お金の支払いが発生する時だった。ギフトエコロジーツアーといっても、貨幣経済に生きている以上、お金が必要である。Casa de Paz で、サムについて買い物に行った時、レジで支払いの段階になって、自分達の食事のための食材であるのだから、自分達で支払いたい、支払うべきであるという思いが強く、その思いに囚われた。筆者自身、その段階で、前述の鈴木栄里の貨幣経済に対する気づきに至っておらず、自身の葛藤はとても大きかった。けれど、その経験を踏まえて、数日後に自分達で料理をするための食材を買うという機会に恵まれた。その際、その食材の費用を払うということで、ギフトを贈るという体験ができた。もちろん、かかった費用を、メンバーで割り勘するという選択肢もあったし、それを申し出たメンバーもいた。けれど、ギフトとして贈るということの方が、割り勘をするよりも、自分の中での幸福感が高かった。ツアー中、もう一つギフトを贈る際の幸福感を身近に感じた例をここに紹介する。ツアー9日目に、お昼の食事とSebastopol Permaculture Skills Centerのツアー料金をギフトとして贈っ

たゲンさんは、「妻が、ソーヤ海のすることだから応援すると言って、このことに協力することになった。最初は、なぜそこまでしなければいけないのかと疑問に感じていた。けれども、今日、こうして実際にギフトを贈り、ツアーのメンバーと行動を共にして、自分自身がとても幸せを感じている。」といったことを語っていた。

ここに挙げたのは、ほんの一部の筆者のあるいはツアーに関係する人々の体験や心の動きであるが、ツアー中には、ツアー参加者が、それぞれの場面で、色々な葛藤や気づきや学びを得ていた。

4.4 ギフトエコロジー周辺の社会的な創造的活動

ツアー中は、UCサンタクルーズ校のキャンパス内や周辺で地域と連携したパーマカルチャーやアグロエコロジーの実践地を複数訪問し、バイエリアの最先端のパーマカルチャーの実践地やトレーニングセンターにも出かけた。また、サンタクルーズではAlternative Santa Cruzでの自転車を中心にしたコミュニティ創りの現場も訪れた。そのどれもが創造的活動であった。その中で、社会的な創造的活動として、ホームレスのための職業訓練としての農園と、エディブル・スクール・ヤード（食育菜園）の二つを取り上げる。

① ホームレスのための職業訓練としての農園（Homeless Garden Project）

ツアー4日目にボランティアを行ったHomeless Garden Project(以下HGP)は、ホームレスを有機農家に育てる職業訓練も兼ねた社会的にも農的にもパーマカルチャーなプロジェクトである。サンタクルーズ近郊の3エーカーの有機農場と関連する機関で、ホームレスの人達の職業訓練、トレーニング中の雇用の斡旋、様々な支援を行っている。

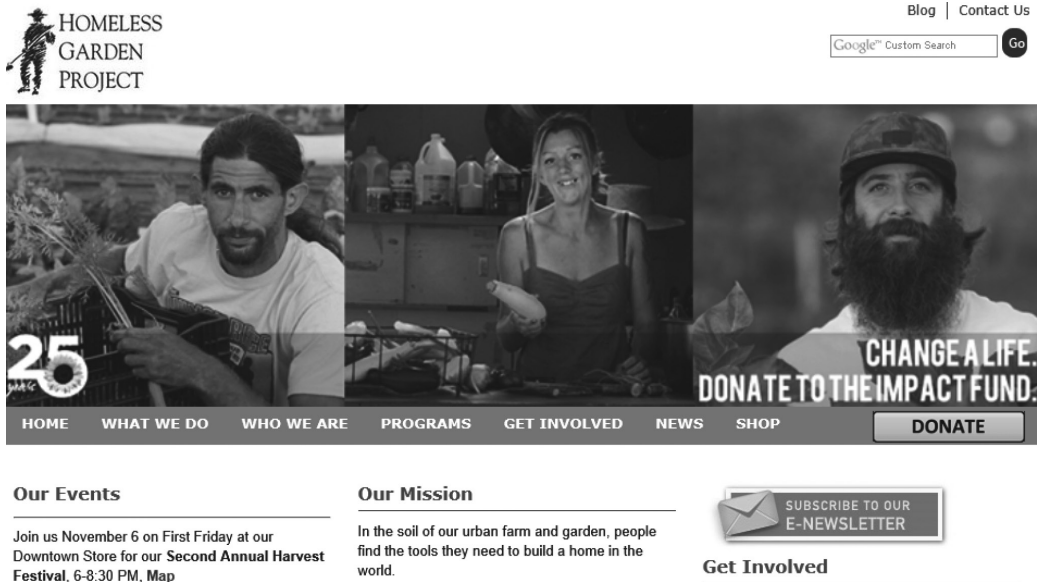


図6：Homeless Garden Project のホームページ

HGPのミッションは、HGPの実践農場で、ホームレスの人達が生計を立てられるためのツールを見つけ出すことである。そして、HGPは、コミュニティ、働く人々、そしてローカルな食料システムが、豊かで、健全であるということを思い描いている。更に、HGPは、全ての人々が成長しやり直しができ、健全な食料を育て分け合うことから喜びが生まれること、健康は、活気にあふれた社会と自然の生態系から生み出されることに価値を置いている⁽¹⁷⁾。

訪れた当日、お昼の時間帯に到着したので、職業訓練を受けている人達、ボランティアの人達と一緒に、農園で採れた野菜のランチをいただいた。その後、ドライフラワーにするための花の収穫作業、収穫した花を束ねる作業、新しく作物を植えるための畝づくりなどの作業を手伝った。職業訓練を受けている人達、ボランティアの人達の年代は幅広く、10代から50代くらいであった。作業中に話をした30代の男性は、ネイティブ・インディアン系であり、一人で子供を育てていると言っていた。20代前半の女性は、ここでの作業がとても楽しいと語った。農場には、スタンドもあり、収穫した農産物が販売されていた。

② 食育菜園（The Edible Schoolyard）@マーチン・ルーサー・キングJr.中学校

食育菜園は、1994年、バークレー市にある公立中学校のマーチン・ルーサー・キングJr.中学校から始まった。アリス・ウォータースは、バークレーの地元で有機栽培された旬な食材を使ったレストラン（シェ・バニーズ）を経営しており、そのレストランは全国的にも話題になっていた⁽¹⁸⁾。アリスは、日ごろ、近所のキングJr.中学校の荒廃ぶりが気になっており、

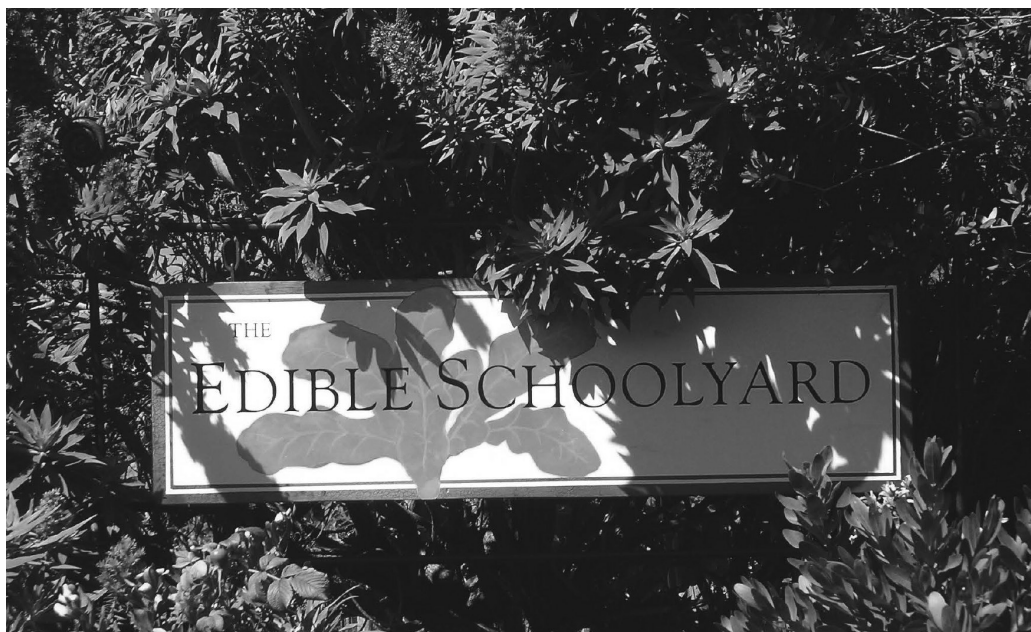


図7: Edible Schoolyard の入口

それをそのまま放置して良いのだろうか、インタビューに答える形で問いかけた。それを耳にした当時の校長が、アリスに連絡をとり、二人は意気投合し、Edible Schoolyardプロジェクトを立ち上げることになった。荒廃した中学校を変えようと、教師たちも立ち上がり、学校改革を推進するアイデアとして採用され、大きな成果をあげた。

実際に、ここで行われているのは、元々駐車場だった場所を菜園にし、その菜園での野菜づくり、そして収穫した作物を使つての料理づくり、そして皆で食卓を囲むガーデンキッチンの授業である。ここで注目すべきは、履修科目として位置づけられた正規の学習プログラムであることであり、単に調理実習、農園実習ではないということである。民族や文化からくる習慣の違いが食の豊かさ、互いを理解するきっかけをつくるなど、その学習方法は、荒廃した学校風土を一変させただけでなく、地域と連携し、地元の有機農家や住民ともつながりながら学校コミュニティの中心的役割を担うまでに成長し、今日、世界的な広がりを見せており、日本においても実践が始まっている（センター・フォー・エコリテラシー、2006）⁽¹⁸⁾。

ツアーでは8日目に菜園を見学した。マーチン・ルーサー・キングJr.中学校は、かつて荒廃していた中学校であったという面影はどこにも見当たらず、立派できれいな中学校だった。また、以前は駐車場だった場所にある菜園は、木々が茂り、果樹が実り、花々が咲いている美しい場所になっていた。菜園の中では、鶏が飼われていたり、藁でつくられた円形上のベ

ンチがつくられていたり、隣の家との境の所には、垣根のように選定されたリンゴの木があった。また、恐らく子供達の手作りの煉瓦で作ったピザ釜も設置されていた。菜園に隣接して料理実習室もあった。近所の人達が、幼児をつれてお散歩している姿も見受けられた。先にも述べたが、この菜園と調理実習室を使って、例えば、数学の授業、国語の授業、社会科の授業が行われている。学びの場の中心に菜園がある、そのことで、荒廃した中学校が立ち直り、子供たちも教師たちも保護者達も、ひいてはコミュニティも変化していったということは、注目に値する。

5. 創造的活動の事例から明らかになったこと

4章では、ギフトエコロジーの実践現場での、創造的活動の事例を、①ギフトエコロジーのベースになっている創造的活動、②ギフトエコロジーの思想で広がって創造的活動、③ギフトエコロジー周辺の創造的活動の3つに分類してそれぞれいくつか挙げてきた。

ギフトエコロジーツアーで、訪れた場所は、全て創造的活動だったといえる。いったい創造的活動の「創造的」たる所以は何なのだろうか？ここで、箇条書きに列举してみる。

- 型にはまらない、あるいは、枠をはみ出している
- ビジョンを描き、それを具体的な形にしている
- 瞑想が大切にされている
- 自然生態系がお手本になっている
- 社会の様々な問題を解決する社会的活動である
- 自分の使命を生きている人達がいる
- 非暴力コミュニケーションのスキルがある
- ギフトを与え、受け取り、ダンスをしている
- アーティストである
- 物事をポジティブに捉えている
- 自らワクワクし、楽しんでいる
- 軸がぶれないが、フレキシブルである（＝レジリエンス）
- 直観に従っている
- スモールで、スローで、シンプルである
- 農的である

といったところであらうか。今後、更に、注意深く観察し、分析を試みたい。

6. おわりに

本論文では、ギフトエコロジーの実践現場における創造的活動を、筆者が参加したTUP2015バイエリアギフトエコロジーツアーで訪れた米国カリフォルニア州のバイエリアでの事例を具体的に挙げながら論述した。サンフランシスコ湾周辺のバイエリアは、反戦運動、ヒッピー文化の発祥の地であり、今日でも、オルタナティブな社会の世界の最先端地域である。その地域で、ギフトエコロジーという、オルタナティブな経済社会を実践している人達の創造的活動は、共通点が多く、同時多発的に様々な活動が起きてきているのだろうと感じる。

ギフトエコロジーツアーは終了したが、メンバーのギフトの冒険は始まったばかりである。ツアー終了後も、すぐに帰国することなく、大半のメンバーが米国に滞在を続け、今も滞在を続けている者、また、いったん米国を離れたが、米国への移住を決めた者もいる。ツアー中にシャワーのように浴びたギフトだが、それぞれの場所で、既にたくさんの恩送りがされ、それが広がっていることだろう。筆者自身、今までにも、たくさんのギフトを受け取っていたこと、そして今も日々色々なギフトを受け取っていること、さらには、ギフトを受け取ると同時に何かを与えていることに気づき始めた。また、常にお金を受け取ったり、支払ったりすることに、意識的になり、そのたびごとに、思考を巡らせるようになった。内田樹が指摘するように、これからは、「ありもの」の資源を皆でシェアしていくしかなく、その際の分配方法は「贈与」しかありえないとすれば、ギフトエコロジーは必然になっていくだろう。

体験したギフトエコロジーの世界は、見ず知らずの14名が、10日後には、拡大家族のような集合体（コミュニティ）になり、そこには信頼と大きな安心感があつた。そのこと自体に大きな希望が持てる。

謝辞

10日間のギフトエコロジーツアーについて、形にしたいと思いながら、なかなかできずにいたので、このような形でまとめることできる機会に感謝したい。ツアーに参加したことで、たくさんのギフトをいただき、同時に、自分の貢献する場も与えいただいた。冒険の旅に誘ってくれたソーヤ・海、鈴木栄里に心からお礼を申し上げたい。そして、拡大家族のようなつながりを持つことができた12名のメンバーとのご縁にも感謝したい。特に、鈴木栄里、土井彩のブログ、宇井裕美がまとめてくれたツアーの行程表は、執筆の際、大いに参考にさせていただき、多くの部分を引用させていただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げる。そして、ツアー中に、宿泊、食事、情熱という形でギフトを与えてくださった多くの方々にも感謝している。最後に、この論文を書き上げることに悪戦苦闘している際に、応援をしてくれた方々、その後押しがなければ、挫折していたことであろう。本当にありがとう。

註

- (1) グリーン・サービサイジングに関して、横村久子 監修 地球環境関西フォーラム循環社会技術部会編、2006「サービサイジングー エコビジネスが売れるものとは? -」 および、http://www.japanfs.org/ja/news/archives/news_id027390.html も参照のこと。
- (2) シェアリングエコノミーに関して、ジェレミー・リフキン、2015「限界費用ゼロ社会―モノのインターネットと共有型経済の台頭」NHK 出版) も、参照のこと。
- (3) スマイルカードの具体的な事例は、Hundred Dollar Kindness Ideas <http://www.servicespace.org/blog/view.php?id=1923> など参照のこと。
- (4) カルマキッチンに関して、詳しくは、土井彩の「代金の無い料理店『カルマ キッチン』創設者・ニッポンさんのギフトな生き方。」 <http://anansoken.magazineworld.jp/column/sanfrancisco/37726/> など参照のこと。
- (5) 鈴木栄里のブログ Delicious Journey for Life の「ギフトの世界への冒険の旅」 <http://www.deliciousjourneyforlife.com/ja/2015/05/19/journey-to-gift/> の中にあった紹介を引用した。
- (6) Tokyo Urban Permaculture に関しては、ソーヤー海、2015『都会からはじまる新しい生き方のデザイン』エムエム・ブックスなど参照のこと。
- (7) パーマカルチャーに関しては、例えば、「安曇野パーマカルチャー」 <http://www.ultraman.gr.jp/perma/> など参照のこと。
- (8) トランジション・タウンに関しては、例えば、「地域自給をめざして楽しくつながるトランジション・タウン」 <http://www.transition-japan.net/what/> など参照のこと。
- (9) シティ・リペアに関しては、「【ポートランド】住人による手作りの街作りが素敵すぎる」 <http://tabizine.jp/2015/05/08/35954/> など参照のこと。
- (10) 「Delicious Journey for Life 贈り合いの世界とは」 <http://www.deliciousjourneyforlife.com/ja/2015/03/27/to-live-in-the-world-of-gift/> に、鈴木栄里が、ツアーの企画・呼びかけ人になった経緯が記載されている。
- (11) ツアーの呼びかけ文の全文「TUP 2015 バイエリア アーバンパーマカルチャーツアー ギフトエコロジー実験企画!!」 <http://tokyourbanpermaculture.blogspot.jp/2015/03/tup-2015.html> を参照のこと。
- (12) おん食堂 <http://onsyokudo.com/> 2015年7月末で閉店になった。
- (13) 元雑誌アンアンの編集者である土井彩は、「会社を辞めて、こうなった。」というタイトルで、an・an 総研 Web Magagine に記事を掲載している。ここでは、「代金の無い料理店『カルマ キッチン』創設者・ニッポンさんのギフトな生き方。」 <http://anansoken.magazineworld.jp/column/sanfrancisco/37726/> を引用した。
- (14) 土井彩の「代金の無い料理店『カルマ キッチン』創設者・ニッポンさんのギフトな生き方。」 <http://anansoken.magazineworld.jp/column/sanfrancisco/37726/> にも、紹介されている。
- (15) 土井彩の「50年間サンフランシスコのど真ん中で、無料で食べ物を配り続けるツリーさん。」 <http://anansoken.magazineworld.jp/column/sanfrancisco/35584/> に詳しい。

- (16) 土井彩の「ギャングの巣窟で家を開放するヒーローたち。」
<http://anansoken.magazineworld.jp/column/sanfrancisco/33763/> に詳しい。
- (17) Homeless Garden Project に関しては、<http://www.homelessgardenproject.org/> を参照のこと。
- (18) Chez Panisse に関しては、<http://www.chezpanisse.com/reservations/> を参照のこと。
- (19) 食育菜園の日本での取り組みに関しては、例えば、愛和小学校に学校菜園（エディブル・スクールヤード）の取り組みを見学してきました
http://magazine.shokuikuclub.jp/kitchen/20150617_050003/ など参照のこと。

参考文献

- Sharable のサイト <http://www.shareable.net/>
KindSpring のサイト <http://www.kindspring.org/>
Nipun Mehta, 2014, “From Sharing Economy To Gift Ecology”
<http://www.servicespace.org/blog/view.php?id=14918>
Robin Kimmerer, 2013, “Braiding Sweetgrass: Indigenous Wisdom, Scientific Knowledge and the Teachings of Plants”, Milkweed Editions
内田樹、岡田斗司夫 FREEex、2013『評価と贈与の経済学』徳間書店
中沢新一、2009『純粋な自然の贈与』講談社学術文庫
坂口恭平、2011『SHARE（共有）と GIFT（贈与） ゼロから始める経済論』
シェア・ライフ エココロ No.56、2011 年 7 月号、pp56-59
サンフランシスコ お役達ガイド http://www.bayspo.com/sf_guid/
<http://www.nk-happy.com/2015/01/15/4267>
けんぼー、2015『シリコンバレーに本社を構える世界的 IT 企業をまとめてみた。
集まる理由とは！？』<http://www.nk-happy.com/2015/01/15/4267>
中野民夫、2014『みんなの楽しい修行：より納得できる人生と社会のために』春秋社
マーシャル・B・ローゼンバーグ、2012『NVC 人と人との関係にいのちを吹き込む法』
日本経済新聞出版社
鈴木栄里、2015『Delicious Journey for Life 贈り合いの世界とは』
<http://www.deliciousjourneyforlife.com/ja/2015/03/27/to-live-in-the-world-of-gift/>
鈴木栄里、2015『Delicious Journey for Life ギフトの世界への冒険の旅』
<http://www.deliciousjourneyforlife.com/ja/2015/05/19/journey-to-gift/> より引用
鈴木栄里、2015『Delicious Journey for Life ギフトの冒険－心の旅路の驚きと学び』
<http://www.deliciousjourneyforlife.com/ja/2015/07/11/emotionaljourneyofgiftexperience/> より引用
センター・フォー・エコリテラシー著、ペブル・スタジオ訳、2006『食育菜園 エディブル・
スクールヤード マーティン・ルーサー・キング Jr. 中学校の挑戦』家の光協会

2015年12月28日受理